



## ごあいさつ

さくらクリニック中野院長 山崎 麻央

コロナ予防対策で徒歩通勤に変えてから、いろんな場所に草花が咲いていることに気づかされました。緊急事態宣言の最中は、街路樹がジャングルの様に生い茂り、自然の力強さを改めて感じました。草木は常に自分のできることを淡々とこなしています。日の光を受けとめエネルギーを作り、季節に合わせて花開くタイミングを窺っています。自分を生かす活動をやめないのです。私たちは気づけば背伸びし、たくさんのお仕事を背負い込み、本来の役割をわすれ、しおれてしまうこともしばしばです。草木はそんな私たちに自分のできることをやりなさい、と言ってくれているような気がします。皆さんもつらいときはため込まずに相談してください、すぐになんでも解決とはいきませんが、一つ一つともに考え、よりよい在宅療養につなげていきましょう。

## スタッフ紹介

今回は3人の先生にコメントをいただきました。

Q1.なぜ医師になったのか？

Q2.今の推しは何ですか？

### 宮下 彰子（あきこ）先生

Q1.祖母がアルツハイマー型認知症であり、その介護を私の母が主にしていた様子を見て、祖母のような高齢者を診たいという気持ちから医師を目指しました。

Q2.井村屋のこしあんぱーです。  
(つぶあんよりなめらかでおいしいです)



### 新谷 晶子（あきこ）先生

Q1.女性でも男性と同じように世界中で必要とされている職業としたい進路を決めました。医師である両親の影響もありました。

Q2.実家で飼っている1歳のトイプードルのアンちゃんです  
(赤毛のアンより命名)。



### 松田 さきの先生

Q1.私自身、自分と家族の健康が一番大切なものなので、患者さんが再び健康に生活できるよう役に立ちたい、現在は治らない病気の治療の研究をしたいと思います。

Q2.関取花さんの曲が好きです。めんどくさいのうた、もしも僕に、なんとかなるんで、それでもいいならくれてやる、等。皮肉っぽい歌詞がそっと心を支えてくれます。



## ～母の願いを胸に、難病支援の道へ～ 患者様ご家族よりご寄稿

全国プリオン病患者・家族会さざんかの会 広報担当 中山 奈津枝様

4年前のクリスマスイブ、母が救急車で運ばれた。「クロイツフェルト・ヤコブ病」との診断。一度も大病をしたことが無かった母が、百万人に1人という希少難病だと知った時、「まさか」という思いと、治療法が無いという現実、どう向き合えばいいのか分からなかった。診断後、数か月は何とか日常生活を送っていたが、病気は徐々に進行。文字が思い出せず「情けない」と泣き出したり、夜中に「死にたい」と泣き続ける母をなだめる日が続いた。

やがて自力で歩けなくなり、話すことも出来なくなった。嚥下も難しくなって、点滴での栄養摂取が必要になった。それでも、私たち家族は「在宅介護のできる限り」という方針を貫き、24時間体制で母を見守り続けた。キティちゃん柄のパジャマや可愛いキャラクターで母の周囲を飾り、笑顔を絶やさない介護を心がけた。看護師さんやヘルパーさんから「こんな明るい介護を見たことがない」と言われるほどだった。その後も肺炎などの感染症との闘いが続き、3年で5回の入退院。最期はヤコブ病が遠因の腎不全で旅立った。母は、難病に罹ったことで研究の役に立ちたいとの強い意志を持ち、脳波検査やブレインバンクに自身を提供した。その思いに応えるため、私は患者・家族会に参加し、この難病に苦しむ方々の支援と、治療法の確立を目標に、活動を始めた。母の一周忌を前に、当時を支えてくださったさくらクリニックの皆様や介護関係者への感謝の気持ちが、改めて深まっている。



身の回りのグッズも楽しく！  
天井に大好きなピンク色の  
キティちゃんタオルを★



## 看護師より

萩中（旧姓：佐々木）です。三次救急の大学病院から訪問診療の世界へ飛び込んでから早数年経ちました。

病院勤務だったあの頃よりも季節の変わり目を感じるようになりました。夏の暑さも和らいで、いよいよ秋の日和になってきたなあと感じています。

雪国出身のわたしとしては、東京の夏は何年たっても慣れません。在宅療養中、その生活を支えるご家族や医療介護関係者の方々も体調不良には十分ご留意ください。

最後に小さいですが、私の愛犬（武蔵と梅子）の写真を添えさせていただきます。今後ともどうぞよろしくお祈りします。

